

日本記者クラブにおけるスピーチ
2017 年 3 月 9 日(木)14:30 ~15:30
スピーカー： ポール・マデン駐日英国大使

土生様、本日は、日本記者クラブへお招きくださいます、どうもありがとうございました。

歴代の駐日英国大使が日本記者クラブで会見を行ってきましたが、私もその慣例を喜んで受け継ぐつもりです。もちろん、今日の外交官たちは、ソーシャル・メディアも駆使しなければなりません。私もブログやツイッターを活用しており、日本の方々から大変おもしろいコメントも頂戴しております。

本日は、まず、私自身の経歴および日本とのつながりについて少しお話をさせていただきます。その後、日英関係に関する私自身の見解を、様々な分野にわたってご説明申し上げます。

私はこの度、大使として日本に帰ることができ、ことのほか、嬉しく思っております。と申しますのも、日本は1988年から92年まで赴任した最初の海外勤務地だからです。当時の日本はバブル経済の真ただ中にあり、国際化や貿易摩擦が盛んに論じられ、平成が始まるなど、思い出が、たくさんあります。その後、私の赴任先の大半はアジア太平洋地域で、最近まで駐オーストラリア大使を、その前は駐シンガポール大使を務めましたが、ワシントン DCの英国大使館でも勤務しました。2005年の愛知万博では、英国パビリオンの責任者を務める機会も得ました。

英国の対日関係はきわめて重要です。外交政策と安全保障、経済、エネルギー、科学技術とイノベーション、そして文化交流と、日英関係には様々な側面がありますが、私は特にビジネス支援を重視しています。

私は長年にわたり日本を訪れていますが、赴任するために戻りましたのは、今回が初めてです。最初の赴任からこれまでの 25 年間、日本は、そして日英関係はどのように変化したのでしょうか。まず、この間、日本では 15 人の首相が誕生しました。そして現在の安倍首相は、G7 の首脳の中で在任期間が最長になる可能性があります。

また、東京に戻ってきて、新たなビルが多く建設されていることに強い印象を受けました。その一方、例えば英国大使館の周辺には懐かしい裏通りが変わることなく、たくさん残っています。当時 1000 円だったお昼の定食は、現在も 1000 円のままです。とはいえ、現在の日本の消費者は以前よりもはるかに広い範囲の輸入品を購入できるようになり、余暇の時間も増えているのではないかと思います。また、外国人観光客の数も増えました。しかし、大多数は近隣のアジア諸国からで、欧米人ではありません。これもまた大きな変化といえます。

一方、私が最初に日本に赴任して以来、英国はどのように変わったのでしょうか。英国は、かつてないほど国際的で多文化的な国となりました。2004 年に東欧諸国が EU に加盟後、若い移民労働

働者が多数英国にやって来て、経済の活性化に貢献してくれました。ロンドンの金融街シティーも、グローバルな金融センターとしてますます存在感を強めています。

最初の赴任以来、日本はいくつもの天災に見舞われたこともあげられます。特に 6 年前に発生した東日本大震災は、まだ記憶に新しく、日本の友人として、津波による被害の映像をテレビで見ながら心を痛めたことを思い出します。今回、大使として着任後すぐに被災地を訪れ、お見舞いの気持ちを表明したかったのもそのためです。先週、南相馬市を訪問して市長と面会し、復興事業を視察しました。日本人の皆様が、力強く立ち直る姿に感銘を受けました。

私は、非常に興味深い時期に、駐日大使として赴任したと感じています。2017 年は世界のあちらこちらで、不確実性に直面する年と言えるでしょう。米国で新たに誕生したトランプ政権の政策が、米国および米国のパートナー諸国にとって何を意味することになるのかと、人々が問いかけています。またヨーロッパでは、英国の EU 離脱の決断が数々の不確実性を生み出しています。ヨーロッパの国々で近々選挙が行われますが、結果については予断を許しません。そして、ここ東アジアでも、強硬姿勢を強める中国、北朝鮮のミサイル計画など、地域の緊張が高まっています。

こうした情勢のもと、英国や日本のような国にとって、互いの重要性が日々増しています。今日の日英関係がますます緊密化しているのは喜ばしい限りです。両国は、法の支配、民主主義、人権の尊重、自由貿易など、数多くの価値を共有しており、同じ考えを持っています。また両国とも米国の重要なパートナーであり、日英それぞれの首相は米国の新政権発足に際し、早々に米国を訪れました。英国にとり日本はアジアにおける安全保障面の最重要パートナーです。昨年 11 月には英国空軍のタイフーン戦闘機が訪日し、日本の航空自衛隊と初の共同訓練を行いました。

また日英両国は世界各地で協力しています。ニューヨークの国連本部では、現在、日本が非常任理事国として、英国とともに安全保障理事会に参加しています。南スーダンでは日本の自衛隊員が平和維持活動に従事しています。またソマリア沖でも、国際的な海賊対処活動のため、英国海軍と自衛隊が派遣部隊を送り協力しています。世界情勢において日本がますます重要な役割を果たしていることを、英国は心より歓迎しています。

さて、日英間のビジネス関係に話を移しましょう。両国は互いに重要な貿易パートナーですが、この関係で最も重要な柱となっているのは、いうまでもなく日本企業から英国への多額の投資です。過去数十年間の投資総額は 6 兆円 近くにのぼります。日本は、欧州以外の国では 2 番目に大きな対英投資国なのです。

私は今回、英国出発に先立ち、対英投資を行っている自動車メーカー、製薬会社、銀行などの日本企業を多数訪問する機会を得ました。そして、これまでの関係が、日本企業と英国経済にいかにより大きな成果をもたらしてきたかを、自分の目で確認することができました。また、英国労働組合会議の代表者とも会い、日本企業は英国内で 14 万人の雇用を創出する優良雇用主であると聞きました。

日本企業への訪問時に特に話題となったのは、当然のことながら、Brexit、即ち EU 離脱という英国国民の決断でした。Brexit が日本企業に不確実性をもたらしていることは、私も理解しております。企業は、それぞれの事業活動の性質により、様々な影響を受けています。英国国内市場を相手としている企業や、中東やアフリカなどへのゲートウェイとして英国を活用している企業であれば、欧州市場向けに大量生産し、あるいは欧州に複雑なサプライチェーンを持つ企業に比べると、明らかにその影響は少ないでしょう。また、規制に関する諸問題を特に重視しているセクターもあると思います。

しかし、そうであるからこそ、英国政府は、英国内の日本企業の具体的な懸念に耳を傾けています。昨年は英国の多数の大臣が、英国の計画について説明すべく日本を訪れました。こうした接触は日本企業より歓迎していただいております。

テリーザ・メイ首相が 1 月に行った英国の EU 離脱に関するスピーチで明らかにした詳細は企業に歓迎されたと、皆様に報道していただきました。メイ首相は、英国国民が離脱に投票した理由を説明するとともに、EU からの離脱交渉において英国が掲げる 12 の優先目標を発表しました。英国は単一市場を離脱するが、野心的な自由貿易協定を結び、単一市場への最善のアクセスを手にすることを目指すと言及しました。また、関税同盟についても正式な加盟国ではなくなりますが、引き続き無関税で、その他の障壁も最小限に留めた取決めを目指します。さらに、英国は引き続き世界中の有能な人材を歓迎すると、メイ首相は強調しました。この点に関しては、これまで通り英国外から優秀な人材を活用できるとの再確認が得られたと、日本企業より歓迎されました。メイ首相はまた、英国はこれまで同様、開放的な市場を支持する外向きの国であり続けると明言しました。EU 離脱後、英国は、EU 以外の国々と自由貿易協定を締結すべく、交渉していきます。英国は日本を重要国とし、優先的に対応していくつもりです。その段階へ到達するまでの間、英国は、引き続き日 EU 経済連携協定の強力な支持者として、早期締結を強く求めています。

英国は、この先も、日本企業にとって重要な拠点であり続ける自信があります。そもそも英国が投資先として日本企業を魅了した利点の多くは、EU からの離脱に影響されるものではありません。英国は今後もビジネスに優しい国のひとつであり続けます。英国は高水準の技能を持つ柔軟な労働力を提供し続けます。また、世界の大学トップ 10 のうち 4 校がある国として、研究開発分野でも引き続き強みを発揮します。科学技術とイノベーションは、日英両国が、大きく協力できる分野であると、着任後の数週間で、すでに認識しました。

日英の協力が進展している最重要分野のひとつとして、原子力が挙げられます。英国は原子力発電所の廃炉に強く、日本でも価値ある役割を果たすことが可能です。これは、先週、福島第一原子力発電所を訪れた時にも話題となりました。同原発の廃炉に関する進捗は、大変印象的でした。また、日立や東芝を始めとする日本企業は、英国における原子力発電所の新設計画に大きく貢献しています。日英両国は、昨年 12 月、これらすべての分野における協力関係締結の覚書に署名しました。

以上のように、日英両国は、多数の分野で相互協力をしています。しかし今後は、国際社会においても、両国が、さらに協力を深めていくことが重要になると思います。両国が共有する価値を主張し、これまで通り国際社会が外向きで開放的な市場を保つよう、支援していく必要があります。

最後に、私は日本に縁のある者として、日本に親愛の情を抱いています。しかし世界では、多くの人々が、日本をそれほどよく理解しているわけではないことも、認識しています。この点においても、オリンピックとパラリンピックは、日本を世界に知ってもらう、絶好のチャンスとなるでしょう。英国にとって 2012 年のロンドン・オリンピック・パラリンピックが重要な機会をもたらしました。多様性あふれるモダンな英国を世界に紹介することができ、また、英国の一般市民は、自国が象徴するものに、誇りを持てるようになったからです。個人的にも、2012 年のパラリンピックは障がいを持つ人々に対する英国国民の見方を変え、大きな成果を上げたと感じています。日本もまた、2020 年の東京大会で、このような成果を全て達成できると思います。いつでもお役にたてるよう、英国政府と英国企業は待機しております。4 年の任期中に開催されるオリンピック・パラリンピックを、今から心待ちにしております。

ご清聴ありがとうございました。では、皆様からのご質問にお答えします。

+++ 以上 +++